

「多様性」を認め合うこと

校長 玉田 絹夫

「多様性」で代表的なのが私の好きな「生物多様性」です。単純に言えば「生き物たちの豊かな個性とつながりのこと」です。地球上の生きものは40億年という長い歴史の中で、寒さに強い種、乾燥に強い種などとさまざまな環境に適応して進化し、3,000万種ともいわれる多様な生き物が生まれました。これらの生命は一つひとつに個性があり、全て直接あるいは間接的に支えあって生きています。全世界の既知の総種数は約175万種で、このうち、哺乳類は約6,000種、鳥類は約9,000種、昆虫は約95万種、維管束植物は約27万種となっています。私も6年かけて、主に土日に植物から初めて、昆虫、鳥と自分が目にする生き物の写真を取ってきました。例えばスマイレだけでも60種、身近なアゲハチョウでも20種もあるので、前に見たこれかなと思って家で調べてみると、近い別の種類だったりすることが多く、日々「多様性」を実感して楽しんでいます。

この「多様性」を人間で考えると、人間には個性や特性があって、その違い(性別や人種、宗教、思想、学歴など)をお互いに認め合い、それを活かすことで、世の中が元気になり、社会が発展していくという考え方です。簡単に言うと、「人間はいろいろあっていいんだよ」ということです。例えば、人間みんなが100m 10秒で走れるとしたら、オリンピックは成り立ちません。みんなが将棋が強かったら楽しくありません。サッカーチームで、シュートを打つのが得意な選手が11人いたら、そのチームはたぶん勝てないでしょう。同質の人間ばかりが集まったチームは、変化に弱くもろいものですが、キーパーや守りが得意というような一人ひとりの個性が融合して力を発揮するチームは、全体として強い力をもつことができるのです。

現在、自分と違う考え方や宗教、人種、国籍の違いを排除する動きが世界中で広まりつつあります。自分の周りさえ良ければよい、同じような仲間が集まり、それで安心できるという考えです。私たち人間はついつい引き込まれてしまいます。例えば、違うことを笑ったり、自分の方が上位だと考えたりしてしまうことから「いじめ」は行われてしまいます。もしかして、学校でもそんな考えが広まってしまうかもしれません。でも、未来を担う子どもたちを、私たち教師や保護者、地域の大人がしっかり導くことができれば、そうならない未来を作ることができると、私は信じています。

子どもたちの成長を見守る学校や家庭、地域で協力して、子どもたちに「多様性」を認めあい、尊重できる心を育てることが大切です。そのため、「隣の机に座っている人は、きっと自分とは違う素敵な部分を持っているはずだよ。あなたも周りのどの子も色々違っていいんだよ。いや、違っていいからいいんだよ。だって、生物も人間も「多様性」があるから、こんなに素晴らしい世界があるんだよ。まず、自分を大切な生命だと認め、周りの人も同じように認めてあげよう、そして、どちらも大切にしよう。今日から違うからいいんだと始めてみようよ。」と導けるように、周りにはいる教師も保護者も地域の大人が協力して、「多様性」を認めあえる子どもたちを育てていこうと考えています。そのためにも、子どもたちの明るい未来のために、今後とも、ご協力をお願いします。

